

## 論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Influence of infants' feeding patterns and duration on mothers' postpartum depression: A nationwide birth cohort —The Japan Environment and Children's Study (JECS)

和文タイトル:

児への栄養方法とその期間が産後うつに与える影響: エコチル調査のデータより

ユニットセンター(UC)等名: 富山ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Journal of Affective Disorders

年: 2021 DOI: 10.1016/j.jad.2021.02.011

筆頭著者名: 嶋尾萌子

所属UC名: 富山ユニットセンター

目的:

母乳育児は世界的に推進されており、母乳育児と産後うつについては関連が示唆されている。そこで本研究では、エコチル調査に参加している親子のデータを用い、産後1か月から6か月までの子どもへの栄養方法が、産後うつに与える影響を調査した。さらに、授乳時の行動が産後うつに与える影響も合わせて解析した。

方法:

103,062妊娠のうち、複数回参加された方は初回のデータのみを使用し、多胎、死産、流産、主要評価項目の回答なし、曝露因子への回答なし、母親以外の方回答のデータ、産後1ヶ月時点において産後うつ症状のある方(エジンバラ産後うつ尺度で9点以上)、を削除した71,448例を対象とした。欠損値を多重代入法にて補完した後、主要評価項目と曝露要因の関連について、ロジスティック回帰分析を用いて分析した。

結果:

分析の結果、完全母乳育児を6か月間継続した群が、他の栄養方法に比べて産後うつになるリスクが低かった。また、栄養方法の種類や期間に関わらず、授乳時に赤ちゃんの目を見たり話しかけたりしている群は、他のことをしている群よりも産後うつになるリスクが低かった。そして、完全母乳育児を6か月間継続しながら、赤ちゃんの目を見たり話しかけたりした群は、母乳育児を6ヶ月継続せず、かつ、そうしなかった群と比べ、産後うつを示すオッズ比が 0.69(95% CI: 0.61-0.79)となり、最も低かった。

考察:(研究の限界を含める)

今回の結果は、完全母乳育児が産後うつに良い影響を与えることはもちろんだが、どのような栄養方法であっても、授乳中に赤ちゃんの目を見たり話しかけたりすることで、そうでない行動をしていることよりも、産後うつに良い影響を与えることを示唆している。この関係性はオキシトシンに媒介されていると思われる。今後の調査では、栄養方法の選択に関わる要因や、実際の授乳時のトラブルや困難を考慮に入れて、産後うつへの影響を検討する必要があるだろう。本研究の限界としては、観察研究であるため因果関係を結論づけるまでには到っていないこと、産後うつの評価基準に臨床的な面接や診断を用いていないことである。

結論:

乳幼児を育てる母親に対して、母乳育児を勧めると共に、赤ちゃんへの関わり方についても適切に情報を与え、支援することで、産後うつの発症を抑えることができるかもしれないと結論づけられた。